https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja
電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関誌

ONLINE ISSN 2434-4311
2023年2月20日発行
国立研究開発法人
科学技術振興機構

J-STAGEニュース No.51

CONTENTS:

J-STAGEアップデートのお知らせ ～全文XML作成ツール/ダッシュボード～ …… 1
J-STAGE Dataユーザ会を初めて開催してみた …… 2
シリーズ学会訪問 ～電気化学会～ …… 4
2022年度ジャーナルコンサルティング実施状況報告 …… 5
ジャーナルコンサルティング ミニセミナー「オープンアクセス誌にするには:実践編」開催報告 …… 6
J-STAGEセミナーに参加してみませんか？ …… 7

J-STAGEアップデートのお知らせ ～全文XML作成ツール/ダッシュボード～

©2023 Japan Science and Technology Agency
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2023.51.1

J-STAGEでは、ユーザーからの要望や電子ジャーナル出版業界の最新動向等を踏まえ、システムの改善や機能拡張に取り組んでいます。このコーナーでは、開発・改修中あるいは新たにリリースされた機能・ツールをご紹介します。

今回は2022年3月にリリースした機能を2件ご紹介します。

①全文XML作成ツールが便利になりました

J-STAGEは全文XMLの導入促進を目的として、WordまたはLaTeXの原稿から全文XMLファイルを生成する「全文XML作成ツール」を提供しています。2020年9月の初期構築以降に寄せられた同ツールへの改善要望を踏まえ、2022年3月に以下の機能を追加しました。

- 複数原稿一括変換：原稿をXMLに変換する際、従来は1ファイルずつしか変換を行えませんでしたが、複数の原稿を巻または号ごとにまとめて一括変換できるようにしました。
- GUI（グラフィカルユーザーインターフェース）編集画面：XMLの記述そのものを編集するテキストエディタ画面に加え、画面の指示に従って必要事項を入力することで書誌事項のXMLデータを作成できるGUI画面を実装しました。
- 複数XMLファイルの一括インポート：既存のXMLファイルをインポートする際も複数ファイルを一括インポートできるようにしました。
- Word原稿からのPDF自動生成：Wordの原稿からPDFファイルを自動生成できる機能を追加しました。
- J-STAGE登載用Zipファイル作成・複数記事一括エクスポート：生成された全文XMLファイルを、J-STAGE編集登載システムへそのままアップロード可能な内容のZipファイル※としてエクスポートできるようにしました。また、複数記事を一括エクスポートできるようにしました。
  ※J-STAGEへXMLを登載する際には、XMLファイル、PDFファイル、全文テキストファイル、その他画像ファイルなどをZipファイルにまとめてアップロードする必要があります。

全文XML作成ツール リリースノート
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_release_20220324_2.pdf

全文XMLとは：
J-STAGEでは登載記事の全文XML化を推進しています。全文XMLとは、記事の全文を、文章の構造や修飾情報に関する指定を含めて「JATS XML」という形式で記述したテキストファイルで、海外大手出版社のジャーナルや文献データベースでPDFと共に広く利用されている国際標準の記事データ流通形式となっています。
全文XMLで論文を登載するとHTML形式で全文を表示できるため、スマートフォンやタブレットでの閲覧性が向上する他、ブラウザの機械翻訳や読み上げ機能を利用することもできるようになります。また、テキストデータマイニングによるデータ駆動型研究への将来的な貢献も期待されています。

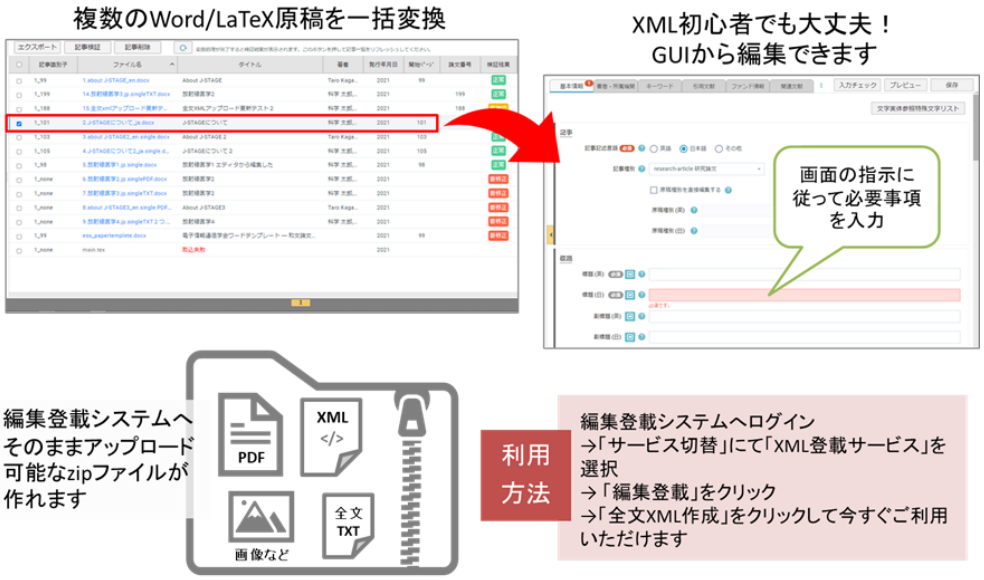


図1　2022年3月にリリースした全文XML作成ツール新機能の概要

②発行機関向けダッシュボードをリリースしました

J-STAGE登載誌発行機関の運営戦略検討に役立つ機能として、自誌のアクセス状況を視覚的に把握できるダッシュボード機能をリリースしました。

ダッシュボード機能では、自誌のアクセス数推移や、国別・PDF/HTML別などのアクセス数内訳がグラフで可視化され、直感的に自誌の現況をつかむことが可能です。また、TSV形式でデータを出力し、Excelなどに取り込むことで独自の分析にも役立てていただけます。

ダッシュボードから得られる様々な情報を、登載誌の運営戦略の検討や広報活動に役立てていただくため、活用ヒント集も公開しています。

発行機関向けダッシュボード リリースノート
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_release_20220324_3.pdf
発行機関向けダッシュボード活用のヒント
https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_dashboard_tips.pdf

今回ご紹介した新機能は、いずれも利用申請等は不要で今すぐご利用いただけます。ご活用をぜひご検討ください。

本件に関する質問等は下記までお問い合わせください。
JST（科学技術振興機構）情報基盤事業部
J-STAGEセンター

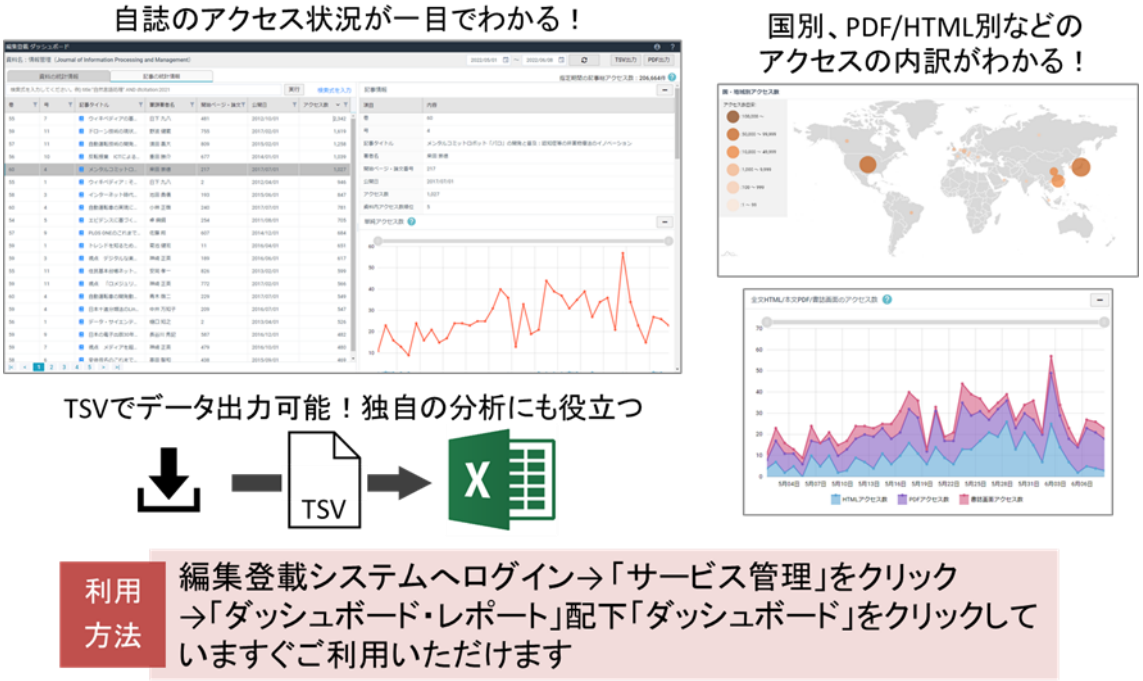


図2　発行機関向けダッシュボード機能の概要

J-STAGE Dataユーザ会を初めて開催してみた

©2023 Japan Science and Technology Agency
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2023.51.2

■はじめに

J-STAGE Dataは、J-STAGE登載誌のためのデータリポジトリです。論文に付随する研究データについて、DOIを付与しオープンアクセスで公開します。2020年3月にリリース、現在、30以上のジャーナルから470以上の研究データを公開しています。

しかしながら、研究データの公開については国際的にみてもなおさまざまな変化が起こっており、J-STAGE Data利用機関や利用ジャーナルにおいて、また、J-STAGE Dataを運用するJSTにおいても、手探りの状況が続いているように思います。そういったなか、J-STAGE Data利用機関にてその利用にかかわる方々、つまりJ-STAGE Dataのユーザが集まり、これまで得られた情報・成果を共有し今後をディスカッションする、そういった場が必要なのでは、と考えてきました。このたび、これをかたちにして実現すべく、「J-STAGE Dataユーザ会」を初めての試みとして開催しました。

■日程および参加者

第1回J-STAGE Dataユーザ会は、2022年12月5日（月）14時から16時に開催されました。Zoomミーティングによるオンライン会議としての開催です。

参加者は、J-STAGE Data利用機関の関係者、ジャーナルの編集委員長、編集委員、編集事務局メンバー、登載作業担当者などとし、それ以外の参加・傍聴は募集しませんでした。また、参加者のバランスを考え、ジャーナルにつき参加者は2名まで、JSTからの参加者も最低限としました。すべての参加者には、講演会やセミナーなどのように講演を聴くだけではなく、積極的に発言することをお願いしました。具体的には、Zoomの設定にてカメラをオン、名前表示を参加者の氏名（フルネーム）として参加する、音声および映像の録音・録画は行わない、また、概要をまとめJ-STAGEウェブサイトなどから公表するが、参加者が特定されるような情報は公開せず、逐語的な記録も公開しない、以上を提示したうえで参加者を募集しました。参加者をJ-STAGE Data利用機関の関係者に限ったうえ非公開・クローズドなミーティングとすることで、参加者の自由闊達な議論を促進したいと考えたわけです。

実際には、J-STAGE Data利用機関のうち19の機関（ジャーナル）から24名の参加がありました。そのうち5名には話題提供としてジャーナルごとの事例紹介をお願いしました。参加者の属性は、編集委員長ほか編集委員が7割、そのほかの編集事務局メンバーが3割といったところです。J-STAGE Dataは自然科学系に限らず人文科学系・社会科学系のジャーナルも

利用していますが、このユーザ会においても、さまざまな研究分野に軸足をおくジャーナルから参加者がありました。

■プログラム

予定されていたプログラムを表1に示します。

実際には、それぞれの話題提供につづく質疑・議論が沸騰したため、予定時間は大幅に超過し、最後に予定していた「参加者から一言ずつのコメント」「自由討論」は割愛せざるをえませんでした。すべての人に発言いただいて議論する、という当初の目的のひとつを達成できなかったことは残念です。

表1 J-STAGE Dataユーザ会 プログラム

JSTからJ-STAGE Dataの現状紹介	10分
話題提供：利用機関から事例紹介	各10分
日本気象学会「気象集誌」：ジャーナルウェブサイトでのJ-STAGE Data紹介	
日本森林学会「日本森林学会誌」：投稿規程でのJ-STAGE Data記載	
電気化学会「Electrochemistry」誌：学会誌でのJ-STAGE Data紹介	
日本質量分析学会「Mass Spectrometry」誌：スペクトルデータの公開	
日本蜘蛛学会「Acta Arachnologica」誌：J-STAGE Dataを利用したビデオ論文の創設	
話題提供：J-STAGE Dataサポートから：公開データの二次利用を促進するメタデータの付与	10分
話題提供：プラットフォームFigshareから：研究データ公開の国際的な現状	10分
参加者から一言ずつのコメント	20分
自由討論	20分

■JST側からの話題提供

最初にJSTから、J-STAGE Dataの概要および現状を紹介しました。2022年改定「JSTの基本方針」において「研究データのうち、研究成果論文のエビデンスとなる研究データは原則として公開とする」ことが明記されていること、J-STAGE Dataの利用申し込み・公開データとも順調に増加していること、J-STAGE Dataでは半分以上のアクセスは米国から、日本からは3割以下であって、J-STAGE Dataは国際情報発信に非常に効果的であること、などを紹介しました。また、現状の問題点として、J-STAGE Dataに利用申し込みをしたもののなかなかデータが公開されないジャーナルがあること、メタデータが不十分なまま公開される例が非常に多いこと、などを述べました。

後半では、利用機関によるJ-STAGE Dataへのデータ公開のサポートを担当するJ-STAGE Dataサポートから、公開データの二次利用を促進するメタデータの付与について紹介しました。データの公開にあたっての国際的な指針としてFAIR原則（https://doi.org/10.18908/a.2019112601）があり、J-STAGE DataはこのFAIR原則を達成可能なデータリポジトリではありますが、FAIR原則を達成するためには、あわせて研究データの（メタ）データを詳細に記述することも必要となります。また、データについてはそのファイル形式が汎用的なものであり、機械判読が可能なものであることも求められます。メタデータの記載については、ふさわしくない例について具体的な例をあげて説明しました。

さらに、J-STAGE Dataが利用するデータリポジトリのプラットフォームFigshareの側から、Figshareが毎年発表しているThe State of Open Dataレポートに述べられた研究データ公開に関する国際的な状況について紹介しました。このレポートは、全世界の研究者（2022年は6000人）を対象にアンケートを実施して結果をまとめています。最新のThe State of Open Data 2022（https://doi.org/10.6084/m9.figshare.21276984.v5）から、研究者は、データ公開の動機あるいは障壁について、まずは自身の業績になるかを考えること、データ公開に関するポリシーにはおおむね賛同していること、データ公開にあたって出版社や所属機関からのサポートを必要としていること、が明らかになったと紹介されました。

以上3つの話題提供については、資料をJ-STAGEウェブサイト（https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/News/TAB4/PastIssues/-char/ja#2212/05）から公開しています。ぜひご参照ください。

■J-STAGE Data利用機関からの話題提供

J-STAGE Data利用機関からの事例紹介については、上述のとおり、非公開を前提としたものであるので、ここでは個々に紹介することはしません。表1のプログラムに示したとおり、5つの機関（ジャーナル）の異なる観点からの話題提供により有用な情報提供があって、それを受けての活発な議論が行われました。一部、参加者のあいだで温度差が浮かび上がり議論が白熱する場面もありました。研究データの公開はなお未成熟な過程にあって、たとえば、データの定義、データの権利者、公開すべきデータとは、データの二次利用のあり方、などについて、考え方や解釈にさまざまな違いのあることが浮き彫りになった感があります。研究分野が異なりデータに対する考え方あるいは感覚的なところが大きく異なるジャーナル・参加者が一堂に会し議論したことにより、新たな発見や気づきの多いミーティングになったと考えています。また、今後の研究データ公開への期待、J-STAGE Dataへの期待についても、あちこちで口にのぼりました。さまざまな研究分野において、研究データの公開が新たな研究手法・研究スタイルを生み出す、そういった期待が高いことを感じました。

■アンケートの結果

ユーザ会の終了後、参加者にアンケートを依頼し17名から回答を得ました（回収率70.8%）。その結果、それぞれの話題提供については76%から94%が「たいへん参考になった」あるいは「参考になった」と回答、また、J-STAGE Dataユーザ会全体については88%が「たいへん参考になった」あるいは「参考になった」と回答しており、高く評価されたものと考えています。次回のJ-STAGE Dataユーザ会には参加されますかという問いには、47%が「ぜひ参加したい」、29%が「参加してもよい」と回答し、あわせて76%が次回のユーザ会への参加に前向きでした。コメントをみるとポジティブなものが多かったようですが、もう少し議論できるスケジュールにすべき、時間が足りない、といったコメントもあり、自由討論の時間が十分にとれなかったことが次回以降の反省点と思われます。

全体として、研究分野の異なるジャーナルが参加することで、その認識の違いを強調する声もあったものの、異なった取り組み、また、意見を聞くことができたとの評価のほうが多く、利用機関からの事例紹介がもっとも高い評価を受けたこととあいまって、こういった他分野のジャーナルとの意見交換は有用であることが裏づけられたように思います。

■おわりに

今回、第1回のJ-STAGE Dataユーザ会として、実際にJ-STAGE Dataを利用している機関・ジャーナルに限って参加者を募集し、また、実名・所属を明らかにしたうえでの参加とするが発言・議論の内容は外部に公表しないとすることで、活発かつ忌憚ない議論を行うことをめざしました。結果として、かなり遠慮のない突っ込んだ討論もあり、この試みは成功であったと考えています。データ公開あるいはJ-STAGE Dataについては、J-STAGEセミナーなどの講演会、また、オープンな場での議論にて取り上げられることも多くありますが、一方で、議論を深化させる意味ではこういったクローズドな場も重要であることが示されたように思います。今回の成功を受けて、来年度も同様にJ-STAGE Dataユーザ会を企画・開催する予定です。今回と同様に参加者はJ-STAGE Data利用機関に限る予定ではありますが、ご興味をおもちの方はぜひご参加ください。

J-STAGE Dataへのお問い合わせは、data-contact@jstage.jst.go.jp あて、お気軽にどうぞ。

シリーズ学会訪問 ～電気化学会～

©2023 Japan Science and Technology Agency
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2023.51.3

水畑穣副編集長

本号では、電気化学会の英文誌「Electrochemistry」（https://www.jstage.jst.go.jp/browse/electrochemistry/-char/ja）の水畑穣副編集長にお話を伺いました。ElectrochemistryはDOAJ収録誌でJ-STAGEでは早期公開、全文HTML公開されています。また、J-STAGE DataやJxiv（プレプリントサーバ）も積極的にご利用されています。Electrochemistryのオープンアクセス化への取組みについてご紹介いただきます。

●貴会とジャーナルの沿革、特徴について教えてください

電気化学会は1933年に創立され今年で創立90周年を迎えます。創立当初の7月に電気化学を通して学術・産業界に貢献することを目的とし学会誌「電氣化學」を発行しました。Electrochemistryは、その後継誌として1999年から発行している学術論文誌で、2018年に学会情報誌の「電気化学」を分冊化した後，原著論文を主とする論文誌となってオープンアクセス（OA）誌として現在91巻まで発行しています。

分冊化当時私は学会の編集担当理事で、Electrochemistryを早くOA誌にしたいという学会の意向により調査に着手し、その後2020年に具体的な取組みを開始しました。実現に向けできる限り編集委員会の中で意思決定ができるように煩雑な手順を編集長および副編集長に権限集中させる改革を行いその結果、編集の早期化が進み現在では投稿から平均5週間でフルペーパーを掲載しています。これにより最近は投稿を検討される方も増えてきています。（改革の経緯等については ※1 参照）

●J-STAGEを利用されたきっかけはなんでしょうか

2012年の利用開始当時、私は編集幹事として実務的な仕事をしていましたが、当時は学会誌を会員限定公開とする学会の意図があり、認証についてJ-STAGEでどこまでできるか不明だったことからサーバ管理を学会内で行っていました。しかし、サーバの運用経費等の問題もあることからJSTとの相談を経て最終的にJ-STAGEで掲載することになりました。

●J-STAGEの良い点、悪い点についてお聞かせください

機能については基本的には良く運用されていると思います。ただ、多くの出版社が電子ジャーナル化を進めていくのと同時に雑誌の見せ方の改善やダウンロード数や各種の指標に関する情報公開を積極的に行ってきた中で、J-STAGEは著者が自身の論文ダウンロード数が分からない等、オープンさに欠けるところがあります。ダウンロード数をオープンにすることを良しとしない考え方もあると思いますが、これらの情報は著者にとって分かりやすい指標となるので改善していただきたいです。

●貴誌の改革について、経緯および苦労や工夫された点、OA化を検討している学会へのアドバイス等教えてください

J-STAGE利用当時から学術成果のオープン化という動きがありましたが、当初は誰でもダウンロードできるようにできさえすれば良いと考えられていました。しかし調べていくとフリーアクセスとOAとでは趣旨が違うことが分かり、OAに対応するために必要なことを編集委員会の中で検討し、様々な規則を変えなければならないことが分かりました。さらに学会だけでなく投稿者にもその意図を理解してもらう必要があると考え、そのための「手引き」（※2）を作成し始め、その中で議論をしていく形をとりました。今までは論文をどのように書くかだけが載っている手引きでしたが、手引きにElectrochemistryのポリシー（出版・編集、倫理、利益相反、著作権、CC-BYなどの二次利用等）や論文に関するさまざまな指針を示すために海外出版社の手引きを参考にそれを現状のElectrochemistryの発行状況に合わせてアレンジしました。DOAJに掲載するために必要な項目等も独自に調べましたが、この手引きを作ることが改革の中で一番大変なところでした。

また、APC(Article Processing Charge)のページ数計算に伴う手順が煩雑であったため、論文の全文XML化を機にページ数計算を廃止しAPCを定額化しました。なお、APCの減額・免除規定については、Research4Life プログラムに準拠した基準を決めています。さらに編集の様々な面で経費節減を行い、それを早期公開手順に振り替えることで公開までの工程を短縮しています。

OA化の推進は、適切な審査・査読を実現するために、学会運営から独立して編集運営を行っていくことが求められています。この2年間で学会誌発行に対する学会内の信用を得るところまできましたが、今後さらに独立性の高い運営にもっていきたいと考えています。

●OA化後、J-STAGEに期待することはなんでしょうか

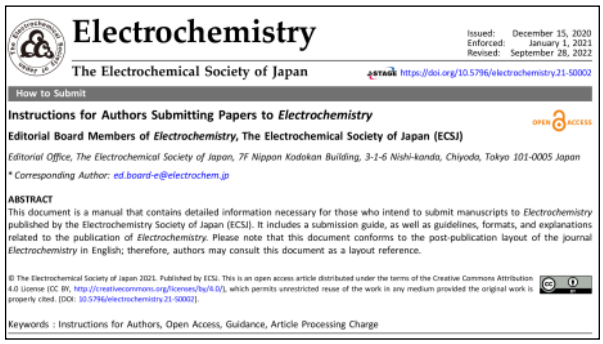
出版物をWebサイトで掲載する場合、イメージを分かりやすくするため、サムネイル画像やGraphical Abstractを大きく表示するところに大きな魅力があります。グラフィカルな部分を強化すればJ-STAGEの強みになると思います。また、J-STAGEはスクロールしないと出てこない機能（ボタン）が多くあります。閲覧者はPDFが主体なのでPDFダウンロードボタンの下にいろんなリンクボタンがあった方が良いと思います。さらに、資料TOPページ画面など、スマホなどで横幅が狭くなると投稿方法などの表示が下の方にいってしまいますが、これをハンバーガーボタンのところに入れ、登載誌用のポータルサイトメニューとしてほしいですね。

機能拡張は経費もかかりますが、可能な範囲でこれらの改善を行うことが他誌との差別化に繋がるのではないでしょうか。論文を書く立場からするとどこに論文を書こうといろんな人の目にとまってくれればそれで良いはずですが、現実は論文誌がどこかということが無視できません。多くの場合、決め手となるのはプラットフォームの堅牢さと信用性はもちろんですが、あとは購買力やアクセシビリティーの高さにあります。大手出版社はそこを踏まえて何十年も取組んでいます。そうなると、著者がお金を掛けてでもその雑誌に掲載したい気持ちになるかどうかということにもなります。元々、学会員限定で公開にしていたElectrochemistry誌は30年を経てOA化されました。その間、掲載費用は学会員の会費でまかなってきましたが、OA化によって出版の段階で賄っておかないと収支が合わないところでした。その時にJ-STAGEが使えたことは非常に大きなメリットでした。

●改革のご経験談、「手引き」はJ-STAGE利用機関、JSTにとっても非常に参考になります。ありがとうございました。

※1　Electrochemistryの改革について
https://journal.electrochem.jp/renewal.html

※2　Electrochemistryへの論文投稿の手引き
https://doi.org/10.5796/electrochemistry.21-S0001


Electrochemistry
The Electrochemical Society of Japan
Issued: December 15, 2020
Enforced: January 1, 2021
Revised: September 28, 2022
https://doi.org/10.5796/electrochemistry.21-S0002
How to Submit
Instructions for Authors Submitting Papers to *Electrochemistry*
Editorial Board Members of *Electrochemistry*, The Electrochemical Society of Japan (ECSJ)
Editorial Office, The Electrochemical Society of Japan, 7F Nippon Kodokan Building, 3-1-6 Nishi-kanda, Chiyoda, Tokyo 101-0005 Japan
** Corresponding Author: ed.board-e@electrochem.jp*
ABSTRACT
This document is a manual that contains detailed information necessary for those who intend to submit manuscripts to *Electrochemistry* published by the Electrochemistry Society of Japan (ECSJ). It includes a submission guide, as well as guidelines, formats, and explanations related to the publication of *Electrochemistry*. Please note that this document conforms to the post-publication layout of the journal *Electrochemistry* in English; therefore, authors may consult this document as a layout reference.
© The Electrochemical Society of Japan 2021. Published by ECSJ. This is an open access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution 4.0 license (CC BY, http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/), which permits unrestricted reuse of the work in any medium provided the original work is properly cited. [DOI: 10.5796/electrochemistry.21-S0002].
Keywords : Instructions for Authors, Open Access, Guidance, Article Processing Charge

2022年度ジャーナルコンサルティング実施状況報告

©2023 Japan Science and Technology Agency
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2023.51.4

「ジャーナルコンサルティング（以下、本プロジェクト）」はJ-STAGE登載誌の質向上と国際発信力強化を目的に、2017年度より実施している取り組みを指します。

■2022年度の実施状況

2022年度は英文誌15誌、和文誌2誌を対象（図1を参照）にコンサルティングを実施しています。2021年度（https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/J-STAGE_NEWS_NO50.pdf#page=5）に引き続き英文誌向けにはジャーナルの基盤（投稿規程等のドキュメント類やWebサイト等）の改善にとどまらず、参加誌の状況に応じて多様なコンサルティングを提供できるよう、10種のコース（図2を参照）を設け実施、和文誌向けにはDOAJ（※）収載要件への準拠を目安として、投稿規程改訂を支援しています。2022年度に新たに提供を開始した『オープンアクセス（以下OA）誌のマーケティング計画』コースには2誌が取り組んでいます。ジャーナルマーケティングの背景や重要なポイントについて理解を深めるとともに、多様なマーケティングツール/チャネルから優先的に取り組むものを自誌の状況から選択し、具体的なマーケティング計画に落とし込むという作業を進めています。

■ミニセミナーのアップデート

J-STAGEではジャーナルコンサルティングを通じて得られた、ジャーナルの質向上に関する基礎的なノウハウをより多くの発行機関の皆様に提供することを目的に2019年度よりミニセミナーを実施しています。内容はOAやクリエイティブ・コモンズ（CC）ライセンスの概要、DOAJ収載申請などについてでしたが、ジャーナルが自力でOA化を実現する後押しができるよう、投稿規程改訂の具体的な手順を解説するなど、より実践的な内容に刷新いたしました。ミニセミナーに限らず、このようなノウハウを活かして自らジャーナル改善を進められるような施策についても検討を進めております。

J-STAGEは今後も発行機関との連携を深め、本プロジェクトを通じて登載誌の国際発信力強化の一助となるよう努めてまいります。

※DOAJ (Directory of Open Access Journals)…国際的な基準を満たす高品質の OAジャーナル及びその記事のメタデータを、言語や地域、分野を問わず収載するオンライン・ディレクトリ・サービス。収載誌の認知度、アクセシビリティ、評判、利用を高めることを目的として、Infrastructure Services for Open Access（IS4OA）により運営されています。

英文誌

- Journal of Transcatheter Valve Therapies（日本経カテーテル心臓弁治療学会）
- Chemical and Pharmaceutical Bulletin（日本薬学会）
- Tokyo Women's Medical University Journal（東京女子医科大学学会）
- Engineering in Agriculture, Environment and Food（Asian Agricultural and Biological Engineering Association）
- e-Journal of Surface Science and Nanotechnology（日本表面真空学会）
- Metallomics Research（日本微量元素学会）
- Southeast Asian Studies（京都大学東南アジア地域研究研究所）
- Magnetic Resonance in Medical Sciences（日本磁気共鳴医学会）
- JFPS International Journal of Fluid Power System（日本フルードパワーシステム学会）
- Physical Therapy Research（日本理学療法学会連合）
- Mass Spectrometry（日本質量分析学会）
- Advanced Biomedical Engineering（日本生体医工学会）
- Annals of Thoracic and Cardiovascular Surgery（ATCS編集委員会）
- JNET Journal of Neuroendovascular Therapy（日本脳神経血管内治療学会）
- The Horticulture Journal（園芸学会）

和文誌

- 学術情報処理研究（大学ICT推進協議会）
- AAOS Transactions（組織学会）

図1 ジャーナルコンサルティング採択誌（2022年度）

コース名	実施数（1コース目）	実施数（2コース目）
①投稿規程の改訂	6	
②運営戦略と分析を伴ったOAへの転換	1	
③新規OAジャーナルの創刊		
④データポリシーの評価		
⑤編集基盤と運用の改善	4	
⑥ジャーナルインパクトファクター（JIF）取得要件への準拠	1	
⑦PMC収載要件への準拠		
⑧投稿数の増加		3
⑨OA誌のマーケティング計画	2	
⑩前年度フォローアップ	1	

図2 ジャーナルコンサルティング提供コースと実施状況

ジャーナルコンサルティング ミニセミナー「オープンアクセス誌にするには：実践編」開催報告

©2023 Japan Science and Technology Agency
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2023.51.5

J-STAGEが2019年度よりJ-STAGE発行機関むけに開催しているジャーナルコンサルティングミニセミナーは、例年、10月から1月にかけて4回、実施しています。具体的には、オープンアクセス、CCライセンス、DOAJの三つのキーワードを軸に、ジャーナルの質向上、すなわち国際的に影響力のあるジャーナルへの成長をめざすうえで必要と思われる基礎的な事項を紹介しています。

J-STAGEはオープンアクセスを推進しています。しかしながら現状、J-STAGEにおいて、無料での公開はしているものの二次利用の範囲・条件を表すCCライセンスなどのライセンス情報をもたないフリーアクセス誌が81%を占め（さらに、フリーアクセス誌のなかには、発行から一定の年月はエンバーゴ期間としてJ-STAGEから無料公開してないジャーナルも多い）、J-STAGEの定義するオープンアクセス誌、つまりフリーアクセスにくわえライセンス情報付きで公開されているオープンアクセス誌の割合はわずか6%にとどまっています。オープンアクセス誌の増加はJ-STAGEの喫緊の課題です。

そこで、2023年1月に開催した第4回は、これまでと内容を一新し、オープンアクセス誌とするための実践的な手順に焦点をあてたセミナーとして実施しました。

2022年度 第4回 ジャーナルコンサルティングミニセミナー「オープンアクセス誌にするには：実践編」の概要は以下のとおりです。

【日時】
2023年1月26日（木）10:00～12:00

【開催形態】
Zoomミーティングによるオンラインセミナー

【プログラム】
1. あなたのジャーナルをオープンアクセス誌にするには（50分）
2. オープンアクセス誌とするために必要な投稿規程改訂の実践的な手順（40分）
3. 質疑応答（20分）

【対象】
J-STAGEジャーナル発行機関の関係者。とくに、ジャーナルをオープンアクセス誌とすることをめざしている、あるいは、興味をもっている方を対象とします。また、オープンアクセスやCCライセンスに関する基礎的な事項を知りたい方も歓迎します。（参加無料）

このセミナーに参加することで、J-STAGE登載誌がオープンアクセス誌となるための具体的な道筋が示され、ジャーナルにおいて議論すべきこと、決定すべきことが明確になる、そんなセミナーをめざし内容を検討・構成しました。

2022年11月25日に参加募集を開始し、J-STAGE発行機関への一斉メールでの案内のほか、さまざまな機会において周知したことにより、最終的には従来のミニセミナーでの平均的な参加申し込み数を大きくうわまわる74名の参加申し込みがあり、実際には54名の参加をもってセミナーは開催されました。

このミニセミナーの実際の内容は、すでにJ-STAGEウェブサイトに発表資料その他を公開しているので、そちらをご覧いただければと思います（https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/News/TAB4/PastIssues/-char/ja）。以下、概略をのべると、最初のセクション「あなたのジャーナルをオープンアクセス誌にするには」では、最初のパートを「オープンアクセス誌 って、なに？」としてオープンアクセス誌について説明したのち、「APCを決める」「CCライセンスを決める」「投稿規程を改訂する」「CC ライセンスを表示する」の4つのステップを設定してこれを順に解説し、このステップをふむことでジャーナルはオープンアクセス誌になる、そういった構成にしました。つぎのセクション「オープンアクセス誌とするために必要な投稿規程改訂の実践的な手順」では、オープンアクセス誌とするためには投稿規程の改訂が不可避ですが、現在のジャーナル出版において必要と思われる項目・内容を網羅したものとしてJ-STAGEが準備している「標準投稿規定」をもとに、具体的に改訂が必要となる条項について、個々に改訂文例を解説しました。

セミナー後のアンケートをみると比較的好意的な回答が多く、今回のミニセミナーは一定の成果をあげたと思っています。ただなお、オープンアクセス化はむずかしい、ハードルが高い、検討すべきことが多い、という声があったのも事実です。はじめての試みとして、試行としての要素も大きい今回のミニセミナーでしたが、来年度以降は、よりブラッシュアップされたものとして同様のセミナーを開催していきたいと思います。

今回のミニセミナーについて、また、J-STAGE登載誌をオープンアクセス誌としていくことについて、みなさんの忌憚ないご意見をぜひお聞かせください。今後とも、J-STAGEを、また、ジャーナルコンサルティングをよろしくお願いします。

J-STAGEセミナーに参加してみませんか？

©2023 Japan Science and Technology Agency
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2023.51.6

■J-STAGEセミナーとは

J-STAGEでは、J-STAGEを利用している学協会のみなさまをはじめ、大学、出版社、研究機関、学術流通に関心のある方を対象としてセミナーを開催しています。年度毎にジャーナル運営にとって有用なテーマを設け、国内外の様々な分野から講演者をお招きし、テーマに沿った最新の情報を提供していただいています。テーマの選定にあたっては、J-STAGE利用機関を含めたアカデミアが現在直面しているさまざまな課題、グローバルな潮流、過去に開催されたセミナーのアンケート結果等を考慮しています。今年度は、学術研究によって得られる研究データの効果的な活用を目指し公開が進められている流れの中、研究データ公開についてジャーナルはどのように取り組むべきかという観点から、テーマを「オープンサイエンスの進展による研究データの共有・利活用の取り組み」と定めました。

■2019年以来の来訪者をJST東京本部に迎えて

2022年度の第1回J-STAGEセミナーでは、サブテーマを「研究データ公開の現状と可能性ーfigshare、バイオインフォマティクス、人文学での取り組みー」と題し、10月4日に開催しました。世界規模で広がった感染症を防ぐ目的で会場に参加者をお招きできない状況でしたが、この日はイギリスよりfigshare CEOのMark Hahnel氏がJST東京本部を来訪されました。Mark Hahnel氏はJST東京本部からZoomに参加され、岩崎渉氏（東京大学）と北本朝展氏（国立情報学研究所）はZoom Webinar上で講演いただきました。セミナーには、大学や学協会等から134名の視聴者がオンラインで参加され、セミナー開催後のアンケート結果では「研究データ活用の国際動向と日本の位置づけが理解できた」「領域が近いため最新情報が入手できた」「Mahaloプロジェクトを初めて伺い、機関リポジトリでも実装できればと思いました」等のコメントがみられました。

第1回J-STAGEセミナー講演者を囲んで
（左より中島律子（JST）、宮入暢子氏（コンサルタント）、Mark Hahnel氏（figshare）、加藤斉史（JST））

■海外イニシアチブとの合同開催

2022年度第2回J-STAGEセミナーは、STM国際出版社協会（STM International Association of Scientific, Technical and Medical Publishers: STM）とのジョイントセミナーという形式で、サブテーマを「The transformation in scholarly publishing: Research data and its role for Open Research／学術出版の変革：研究データおよびオープンリサーチにおけるその役割」と題し、11月8日に開催しました。当日は、STMのCEOのCaroline Sutton氏の他、数名の来訪者をJST東京本部に迎え、セミナーのファシリテーターやモデレーターを務めていただきました。セミナー講演者として、白井知子氏（国立環境研究所）、Ingrid Dillo氏（Data Archiving and Networked Services）、Iain Hrynaszkiewicz氏（Public Library of Science）が、それぞれ日本、オランダ、イギリスよりリアルタイムで参加されました。オンラインで参加された視聴者は147名にのぼり、セミナー開催後のアンケートでは「研究データの公開・DOI付与についての先行取組み事例として、具体的なお話をお聞かせいただけて大変参考になりました」「PLOSの存在を知らなかったので、参考になりました」といったコメントが寄せられました。また、オンライン形式での開催については、気軽に参加しやすいものの「対面がよい気分のこともあるので、ポストコロナにおいてはdualで開催してほしい」という声も聞かれました。

■次回のJ-STAGEセミナーは2023年3月開催予定

今年度3回目のJ-STAGEセミナーは2023年3月中旬にオンラインで開催する予定です。多様な分野から講演者をお招きし、研究データの共有と利活用のさまざまな実践事例について紹介いただきます。ぜひ、3月に開催するJ-STAGEセミナーにご参加ください！

※2022年度第3回J-STAGEセミナーの参加お申込みは2月下旬にJ-STAGEのWebサイトに掲載予定です。
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja

※第1回、第2回J-STAGEセミナーのプログラム、講演資料はこちら。
https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/News/TAB4/PastIssues/-char/ja#2212/02

※第1回J-STAGEセミナー公開動画はこちら。
https://youtube.com/playlist?list=PLSXgr8_ZxZT3CoThodFqlpbFg7f7rdQ0I

※第2回J-STAGEセミナー公開動画はこちら。
https://youtube.com/playlist?list=PLSXgr8_ZxZT23jYY2la4ItoRXi_SVUnqP

第2回J-STAGEセミナー開催直前の会場設営の様子

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja

◆JST公式Twitter(@JST_info)
JSTからのプレスリリース・募集案内・イベント情報などをお届けします。

https://twitter.com/JST_info

◆J-STAGE公式Twitter（@jstage_ej）
J-STAGEのメンテナンスやイベントに関する情報などをお届けします。

https://twitter.com/jstage_ej

ぜひ、フォローしてください！

J-STAGEニュース No.51　　2023年2月20日発行
編集発行：国立研究開発法人科学技術振興機構 （JST）
情報基盤事業部 研究成果情報グループ
〒102-8666
東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
E-MAIL ：contact@jstage.jst.go.jp
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja
©2023 Japan Science and Technology Agency